

# 『我身にたどる姫君』の女帝

—— 物語史における女主人公の系譜 ——

辛 島 正 雄

## 一 はじめに

鎌倉時代物語『我身にたどる姫君』では、物語史上空前絶後の女帝が、実現する。これについては、従来、「いかにこの物語が趣向の奇を求めたか」の最たるものとして、しばしば言及されてきたところである。だが、さらにすすんで、その積極的な意義はとなると、これまでの研究は、ほとんど何も語ってくれない。このことは、女帝の登場が、たしかに目新しいものではあっても、そのめずらしさに見合うだけの問題性を孕んでいないと判断されていたことを物語ろう。しかし、物語のながれを注意深く辿ってみるならば、女帝誕生も、けっして奇を衒っただけの唐突なものではなく、そこに至るまでの必然性のごときものが、浮かび上がってくるようである。その点については、別に詳論した（拙稿「物語史へ、源氏以後・断章——『夜の寝覚』「今とりかへばや」から『我身にたどる姫君』へ——」へ源氏物語とその周縁」（一九八九年、和泉書院）所収）ところであるが、

本稿では、その女帝に再度スポット・ライトを当て、物語史における女主人公の系譜という観点から、別稿に触れえなかった、その原点としての『竹取物語』のかぐや姫の存在に注目し、その他、一・二の物語との関連にも言及してみたいと思う。

## 二 「竹取物語」の影響

いったい、『竹取物語』が物語史上に占める位置の重要性については、ここ数年とみに認識が高まってきた感があるが、それは、もっぱら、『源氏物語』とのつぎきならぬ関係の深さが、具体的に解明されてきたためであるといえよう。しかし、その一方で、『竹取物語』の享受史そのものについては、例えば、河添房江氏によれば、次のように概観されることになる。

源語により竹取の得た映えはえしさは、束の間の幻影にも似た趣、そんなきびしい享受史の線しか描けないのであった。

浜松・寝覚・狭衣・とりかへばやといった平安後期物語

群でも、竹取の影響はしるく認められるけれども、これらが掴み上げたものは、源語に比すと、竹取の表層を上滑りしただけの感がある。しかも、各作品なりの踏み込みを見せたというよりは、源氏物語の竹取引用に色上げされたものも多い。だが、後期物語のしめす位相は、それとて竹取受難の長い季節からすれば、実はほんの前触れであつたとさへいいうる。少なくとも現象面では、それらは源語における竹取投影に気付きえたし、それが曲りなりにも規範性を有して、この古色の物語に批判を封じながら注視をうながす結果となる。後期物語の時代にあつて、竹取の享受は皮相的にもせよ明るい光につつまれていたとも言えようか。

その受容史が深刻な先細り状況に見られるのは、むしろ中世を境にしてであつた。平安後期物語を節目に、竹取の引用も途絶えがちで、この古物語にもはや華やいだ享受の場があてがわれなかつた様相が窺われる。さらに文永八年成立の風葉和歌集の入集歌を最後に、その享受史は、実隆公記の延徳三年八月一日の条まで、文献上じつに二百一十年余りの空白期をきざむ、という痛ましきものであつた。しかも、ことは竹取の直接的な受容相にとどまらない。たとえば準拠・典拠・引歌の博搜に意欲をしめした、中世源氏学の視角ともクロスしているのである。

たしかに、従前の研究につくかぎり、『竹取物語』が、『源氏物語』にその文芸的真価が存分に汲み上げられたほかは、表層的

な受容にとどまり、しかもそれが先細りしていったという観察に、落ち着かざるをえないであらう。しかし、物語史が、『源氏物語』を契機に、急速に〈女〉の存在性に関心を集中させていった事実を思えば、『源氏物語』の女性像のさらに向こうにあるかぐや姫の存在は、その後の物語にとつても、否応なしに視界に入つて来ざるをえないし、けつして軽いものではありえなかつたのではないか。『夜の寢覚』への『竹取物語』の影響を論じられた永井和子氏に、「物語の女主人公はすべて結局かぐや姫にならざるをえない」との発言があるが、別稿において、『夜の寢覚』の中の君↓「今とりかへばや」の女中納言↓「我身にたどる姫君」の女帝と、女主人公の系譜を辿つてみた筆者にとつて、これは素直に共感できるところである。おそらく、〈女〉に関心を向ける作者たちの中に、かぐや姫は、〈女〉の存在感覚の原点として、深く刻印されていたのではあるまいか。具体的には、今後の個々の作品の詳細な分析・検討を俟つべきであるが、女を軸とする物語の起点に「かぐや姫の物語」を据える視点は、是非確保しておきたいと思うのである。

### 三 『我身にたどる姫君』と『竹取物語』

さて、『我身にたどる姫君』は、『風葉和歌集』撰進（文永八年（一二七二）と前後して完成したかと思われる物語であり、河添氏のいわれる『竹取物語』に「華やいだ享受の場があてがわれなかつた」時期の作品であるが、その女帝の形象化には、『竹取物語』が大きく関与している。

『我身にたどる姫君』の女帝の崩御を叙する部分に『竹取物語』の甚大な影響があることは、すでに最初の注釈書である徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』（一九八〇年、有精堂）において指摘があり、その後の今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君』（七冊、一九八三年、桜楓社。以下の本文引用は、本書による）にも詳しいが、ここで、物語の展開に即して、とりまとして見ておきたい。

『我身にたどる姫君』巻五は、思いがけず即位することとなった女帝が、早くより退位の希望を抱きながらも、六年に及ぶ治世の末、崩御するまでを描くのであるが、その多くは、超人的な女帝の姿と、その神秘的な崩御の次第に費やされる。

まず、開巻早々、女帝の御代が、「世に見ならはぬさまにのみ治まり静かなる」（一五頁）ものであることが告げられ、その女帝の姿を、

あやにくにつくろはせたまふ事もなき御さまかたちをはじめ、何の色あひもなき白き御衣ども、紅のことなることなきも、またたくひあるまじき光にたてまつりなすからは、さらに天降れらん乙女の姿も及ぶまじう、つやつやとめでたき御髪のですまで迷ふ筋なきをはじめ、御衣のかさなりなどまで、まことに言葉もおよぶまじくぞおはします。

（一六頁）

と賛美する。巻四でのかの女（入内し、皇后となっていた）の印象が、同じ三条帝に入内した藤壺中宮や後涼殿女御に比較して、ぐっと薄いものであったことを思うと、急激な理想化のな

されていることが注意を惹くが、ここに傍線部のようなレトリックが用いられていることは、その後の展開を知ると、なかなか意味深長である。

その年、女帝は、年明けには譲位を、と準備したものの、翌年には春宮（藤壺皇后腹の第一皇子）が重病に陥り、「天照御神のをしみきこえさせたまふ」（五八頁）ゆえであることがありありと顕れたため、どうしてもかなわない。

その後、女帝の母嵯峨女院の崩御があり、服喪の間、譲位はまたもや見送りとなる。そして、故女院の三回忌の法要の折から、女帝をめぐって、超常的な事態の記述が連続することになる。

その法要の際の女帝については、次のようにある。

上は、かやうのほどに、あまり御精進（ごしん）の日数のみ積らせたまへばにや、少し面瘦（めんしゆ）せておはしますしも、さらにこの世の物と見えさせたまはず。いかなるにか、この頃となりて、あらぬさまの御光添ふ心地して、もとより限りなかりし御衣の匂ひなども、あまり様あしく、九重の内も様あしきまでのみおはしますを、朝夕さぶらふ人はなかなか驚かねど、皇后宮はかしこき御目に、なほあやしきまで見たてまつらせたまふ。

（九九頁）

異光・異香を発する女帝は、ここに急速に神仏のごとき様相を帯びてくる。これに応ずるようにして、その場にいた皇后宮は、ふとまどろんだ間に、不思議な夢を見る。

いひしらず気高げなる人々の、姿形をはじめ見もならはず

厳<sup>いつか</sup>しげなる、この設けられたる御帳のあたりの四王の座に着きたまふべきとおぼしきも、上の御前のおはします御簾の前にいみじう畏まりて過ぎぬ。またまたもてかしづききこゆるさまたぐひなきに、またあやしく、上のまたおはしけるにやと見えて、えもいはず清らなる御姿にて、この御かたはらにおはしける、いといたくうち泣かせたまふ。

あら玉の三年の月日なほ照らせ

天つ空には君を待つとも

とのたまふを、上は聞き入れさせたまふ気色もなし。端をながめいらせたまひて、

にほひそふ御法の花に急がれて

かひなき月日いかがとどめむ

とのたまはするを、いかにと聞えんと思しめす程に、うち見開けたれば、云々  
(九九一—一〇〇頁)

女帝を、四天王に護られる阿弥陀如来に擬し、故嵯峨女院と思われる人物との贈答が交わされ、なお三年の治世を、という相手に対して、女帝は、これ以上生きてゆく必要のないことをいう。もちろん、死期の近いことをいっているのだが、その死とは、「天つ空」に「待つ」母のもとへの帰還なのである。

ついで、八月十五夜の条になると、濃厚に『竹取物語』との重ね合わせが図られてくる。

八月十五日、いと隈なき月影に、御消息あれば、例の、宮のぼらせたまふ。例よりはなつかしうたをやかにて、二間にぞおはします。月の塵も曇らぬに、御簾をさへ少し上げ

てながめおはします御傍目の、なほたぐひなくのみ見えさせたまふに、(中略)何事と言に出でさせたまはねど、ただいとかりそめに思したる御気色を、そぞろに涙こぼれて、急ぐらむ御法の花の匂ひゆゑ

むなしき月を我やながめむ

と、心ならずうちながめられぬるを、云々

(一〇三—一〇四頁)

皇后宮は、「すでに半ばは地上の人ではない」女帝の姿(ここに、月を見てはもの思いに沈んでいたかぐや姫の面影が、おのずと重なってくる)に、先の夢の中の女帝の歌を思い出し、「急ぐらむ」云々と、口に出さずにいられない。

物語の世界で「八月十五日」とあれば、連想はおのずと『竹取物語』を引き寄せる。いうまでもなく、『竹取物語』では、その日はかぐや姫の昇天の日であった。が、ここでは、その夜の興趣にまかせて、誰にも聞かせたことのない琴の秘曲を弾ずることになる。それは、「あやしき前の世のとかやの御手」(一〇四頁)であらうという。

八月十五夜と琴の演奏ということでは、「うつほ物語」「楼上下」巻の大団円が想起されるが、楽器を琴に限定しなければ、『夜の寝覚』巻一のいわゆる天人降下事件も視野に入ってくる。ここでは音楽奇瑞譚の伝統も考慮されねばならないが、いずれも『竹取物語』との関係の取り沙汰される部分であったことは、興味を惹く点である。

その夜、女帝と皇后宮との間で交わされた歌が、次のような

ものであった。

長き世と契りしことの緒を絶たば

今宵の月をそれとながめよ（女帝）

緒を絶えてしのばむことも幾よとて

空行く月の影はなるらむ（皇后宮）（二〇九頁）

女帝の歌には、かくや姫が翁夫婦に書き置いた文の、

月の出でたらむ夜は、見おこせたまへ。（八〇頁）

の一節が、はるかに響いているのであらう。

同じ夜、三条院の夢枕に、女帝が立った。

院の御夢に、内の上いとかりそめなる御座におはしますを、

「いかなれば」と聞えんと思しながら御覧すれば、春秋の

花のえもいはず咲き満ちてかをりあひたる、広き川の心地

す。御覧じなれたる行幸のにもあらぬ玉の輿の、いひしら

ず飾れるを、この御迎へとおぼしくて、少し遠らかに設け

たるを、「いとあさまじう。いかで」と聞えさせたまへば、

色に出でん秋の涙のかひもあらじ

月の都に契り絶えなば

とのたまはするに、御袖をひかへて、いみじう泣かせたま

ふ程もなく、うちおどろかせたまへるに、やがて御涙は所

せく流れ出でにけり。（二二一―二二三頁）

「月の都」も、『竹取物語』との関係を示す、キイ・ワードで

ある。女帝を迎えに來たとおぼしき「玉の輿」は、『竹取物語』

の「飛ぶ車」に対応しよう。夢の中とはいいながら（というよ

り、夢の中であるからこそ、このように描けるのだが）、まさに、

かくや姫昇天の再現か、との趣である。

八月二十日頃、三条院への行幸がある。その折の女帝の様子

は、「何事につけても、この世の人とおぼえさせたまはぬ」

ものであり、三条院は、思わず、「月の都のみぞ恐ろしう思し

めされて、えしのばせたまはぬ御夢語さへうち出でさせたまへ

る」のであった。女帝も、わが身の異常をもはや隠しきれない

との思いから、

おほかたのすみはてぬよのはかなさを

月の都に誰かかこたん

と詠むと、三条院は、

限りあらん雲井の道はかはるとも

世々と頼めし契りたがふな（二一八頁）

と応じ、さらに名残を惜しみつつ、二人は別れる。

還御の翌日、にわかに讓位の定めがある。紫宸殿に出御した

女帝の姿は、「あざあざとえもいはぬ御ぐしの肩つきなどの見

えさせたまふは、ただ神などの現れおはします心地」（二二四頁）

のするものであった。例の異香は、「承明門のあたりまで」（二

二八頁）漂うすさまじさである。

その日、女帝が、いつにもまして念入りに潔齋しているのを、

皇后宮は妙に胸騒ぎがして落ち着かないので、急いで女帝のも

とにやってくる、女帝は『法華經』第八卷の終わりの方を聞

いていた。信頼し合う貴女二人の最後のやりとりが、次のよう

に描かれる。

宮はただ添ひきこえておはしますを、かく心得たまへるを、

いとほしうも恥づかしうも思さるれば、すこしうちほほゑみて、

立ち帰る雲井は幾重霞むとも

君ばかりをや思ひおこせむ

宮は、ましてえ聞えやらせたまはず。

花の色は霞も雲も隔つとも

恋ひん夜な夜な匂ひおこせよ

と聞えさせたまふ程もなし。思ふもしるく、白露の消え行く心地するに、御手をとらへて、「やや」と聞えさせたまふにぞ、人々起き騒ぎ、御誦経なにくれ、そのこととなし。頭弁なども、かうてなりけりと思ひ合すれば、かひなき御祈りども、いづこのいひ所なし。 (二三三—二三四頁)

女帝は、故母女院の待つ「天つ空」(前掲「あら玉の」の歌)に「立ち帰る」——昇天である。もちろん、ここには、迎えの「玉の輿」や「飛ぶ車」が来ることもなければ、女帝の肉体が、即身成仏のごとく消え去る奇跡もない。「白露の消え行く心地するに」も、紫の上の死去の「まことに消えゆく露の心地して、限りに見えたまへば」(「御法」巻)を模したものであり、何ら特殊な表現ではない。だが、これまで積み重ねられた女帝をめぐる神秘的な話のとりめとして、「白露」消滅のイメージは、人の世の無常をいうことばのあやにとどまらぬ、死を直叙したかのごとき——あたかも露が蒸発するように、女帝の姿が色を失ったような錯覚を覚えさせる、不思議なりアリティがある。「車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ」(八二頁)と

するかぐや姫の派手な昇天とは、まことに対蹠的であるが——(もつとも、女帝の近習女房たちが、その後昇天して、兜率天の内院に集まって歌会を開いた、という、茶目つ氣たっぶりの後日談が巻六巻末に見え、天上界そのものは、なかなか賑やかであるらしい)。

#### 四 女帝の死の原像

このように、「我身にたどる姫君」の女帝の造型には、かぐや姫の映像が意識的に重ねられているわけであるが、その重ね方の特質は、かぐや姫の昇天を死のシンボリックな形象化として把握している点であろう。もつとも、このことは、すでに「源氏物語」が、紫の上の死の叙述にあたつて、明確に意識していた前例があり、前述のように、女帝の死の形容が紫の上の死の表現を襲ったものであったことを思えば、女帝におけるかぐや姫との関係は、間に「源氏物語」を置いて考えることが必要である。が、それでもなお、「我身にたどる姫君」が、ひたすら死に行く女帝に焦点を当てているのは、見逃すべきではない。「源氏物語」は、何度となく愛する女に去られた男の姿を描いては、「竹取物語」の結末の文学的感動を蘇らせた。更衣を失った桐壺帝、紫の上に先立たれた光源氏、宇治の大君、さらに浮舟を失った薫……。だが、そこでは、去られた者の悲傷が、大きなウェイトを占めていた。もちろん、後になればなるほど、死に、失踪して行く女を描くことに、力が注がれるけれど、それに相對する男の存在も重い。その点、「我身にたどる姫君」

の場合、女帝の死去が、別れの悲しみの中で盛り上げられるようなことはない。巻五巻末、讓位と聞いて、これからの女帝との甘い生活に胸ふくらませた矢先、その崩御の報に接した三条院の描かれ方を見よ。なかなか余韻嫺々たる幕切れながら、そこには、単純で子どもじみた男心を軽く皮肉る余裕さえある。

いったい、かぐや姫が昇天する際、かの女は、なぜ悲しまねばならないのだろうか。本来、いわゆる羽衣伝説とは、地上に運悪く囚われた天女が、念願の昇天を果たすのが、その結末の基本であった。いうまでもなく、『竹取物語』の結末は、そうした伝承的なパターンを、大きく踏み破っているのである。そして、『源氏物語』は、まさしく、物語文学たる『竹取物語』の神髓を、継承していたのであった。それとの対比でいえば、『我身にたどる姫君』の女帝は、むしろ、物語『竹取』を通じて、抜けて、それ以前に広がっていたであろう伝承の世界での主題性を継承するものといえないか。女帝もまた、三条院と、皇后宮と、別れを惜しむところはあった。しかし、それは、しよせん『竹取物語』の終末のごとき哀切さをたたえたものとはなりえない。なぜなら、女帝には、昇天（死）への強い意思があり、この世への恋々たる思いが、微塵もないのだから。女帝崩御に、死者を悼むしめつばさがなく、死の直前まで威厳を崩さなかった姿を賛仰することに意が用いてあるのは、それゆえ、当然であった。女帝は、一見、かぐや姫の再現のようでもあるが、その昇天にまつわる主題のありかは、およそ対極を向いているとせねばならない。

## 五 女帝造型の先蹤

こうして見てくると、女帝とは、地上に生を受けながらも、やがて自己の「かぐや姫」性が発現し、昇天して行った人物だということになる。もっとも、その昇天とは、時代思潮を映してか、困難とされる女人往生とダブらせてあるわけだが。

ところで、こうした女主人公設定のありかたは、物語の世界では、ある意味で、伝統的である。従来の『源氏物語』を規準とした視点からは、物語が再び伝奇的な世界の浸食を許しているのだと解することになるのだろうか、本質的に、物語とは、そうした想像力の働きを、許容しやすいものであるらしい。したがって、あれほど現実的な主題に立ち向かった『夜の寢覚』が、開巻早々ヒロインの夢の中に天人を降下させるようなことをしているのも、木に竹を継ぐがごとき伝承的世界への安易な凭れかかり、などといって、怪しむには及ばない。永井氏のことばを借りれば、「中の君は、さしずめ、五人の貴公子のうちの一人と、いやおうなしに契りを結んでしまったかぐや姫<sup>10)</sup>」でもいうべき存在なのだから。

この『夜の寢覚』と『我身にたどる姫君』とを結ぶ線の中に位置し、女主人公とかぐや姫との関係において注目されるのが、『有明の別』のヒロインである。この人物の造型については、大槻修氏に詳細な論考があるが、男装の姫君ということで、新旧「とりかへばや」の明らかな影響下にあるものの、そのみにとどまらず、散逸「隠れ蓑」を思わせる隠身の術を用い、さ

らには、音楽によって奇跡を招く、超人的な人物なのである。そして、巻三においては、院の四十賀を祝う三月十四日の夜、春宮の笛に合わせて琵琶を奏するや、七人の天女が降り来たり、その天女の一人との贈答によって、かの女の前身が天女であったことが判明するという次第なのである。その贈答は、次のごとくである。

この世にはいかがとどめむ

君とわが昔たをりし花の一枝（天女）

花の香は忘れぬ袖にとどめおけ

なれし雲居にたちかへるまで（ヒロイン）<sup>12</sup>

また、その薫香は、まさしく天女のもので、同一であったという。物語は、ほどなく終結するのであるが、そのかなたに、いずれ、このヒロインにも、昇天の時が訪れるのであらう、との想像を、かき立てる。

おそらく、かかるヒロインの性格づけには、かぐや姫の面影というのみならず、『狭衣物語』巻一の天稚御子降臨の趣向を借用しつつ、直接には、『夜の寝覚』の天人降下事件がヒントとなっているのではなからうか。すでに、河添氏の指摘のあるところだが、夢中に天人が、「おのが琵琶の音弾き伝あべき人天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり」と語るの<sup>13</sup>は、「書かれざる中君の前世の輪郭なり」とほの透かせる<sup>14</sup>わけ<sup>15</sup>で、まさに『有明の別』のヒロインの先蹤たるに足る。

ところで、『我身にたどる姫君』の女帝をめぐる後日談に、

最終巻八巻頭のエピソードがある。八月十五夜（一）、親しかった大宮（皇后宮）の夢に故女帝が現れ、さらに、猶子であった今上（二の宮）の宿病を平癒させるべく、天下って、『花の一房』（一五一頁）を与えて還ったというものである。この「花の一房」については、「霊薬である。『竹取物語』の、帝に奉った不死の薬を模したか」との指摘があるが、「花の一房」という形態をとっていることからすると、「花の鬘一房」を奉った『有明の別』との類似が、あらためて注目されよう。また、女帝の降下は、讓位の折と同じ匂いが立ちこめたことで、疑いなかった、というのも、『有明の別』のヒロインの匂いが天女のもので同じであったとすると、天上と地上とを結ぶ一つのメルクマールに香りが用いられたという点で、通うものがある。

もちろん、これらのことが、『我身にたどる姫君』が『有明の別』の直接の影響下になった結果であるかどうかは、定かでない。ただ、物語が、常に人間界を越えた彼岸的なものへの眼差しを持ち続けていて、それを作中人物の造型に盛り込もうとする試みが、『竹取物語』のかぐや姫を原点としながら、かなり執拗に繰り返されていた事実は、おのずと浮かび上がってくるのではなからうか。

## 六 おわりに

物語史において、『竹取物語』の占める位置は、予想以上に重要である。しかし、それは、『竹取物語』原典の愛読の歴史がしからしめたというより、そこに内在する人間存在への認識



に、ことに「女」の存在性への認識に、後の作者たちの想像力の根幹の部分で共鳴するものがあつたためであるように思われる。しかもそれは、物語「竹取」の一回的創造への理解というよりは、より多く伝承的イメージと連なっていた。だとすれば、物語中に「竹取物語」への明確な言及等がなくなるとも、すでに女主人公には「かぐや姫」的性格の付与されていることもありうる。「今とりかへばや」の女中納言などは、かかる観点から再検討できそうだが、すべては後日を期することとしたい。

(一九八八年十二月稿)

注(1) 金子武雄著『物語文学の研究——本文と論考——』(一九七四年、笠間書院) 所収「わが身にたどる姫君の研究」五九五頁。

(2) 河添房江「竹取物語の享受」(『国文学』30巻8号 一九八五年七月) 七一頁。

(3) 永井和子「寝覚物語——かぐや姫と中の君と——」(『国文学』31巻13号 一九八六年十一月) 九五頁。

(4) 「竹取物語」の享受は、当然のことながら、原典の直接的享受に限定されるべきではなく、伝説や俗説をも含めた、多様な相において捉えられねばならない。そして、女主人公を軸とする物語の系譜を考えようとするならば、『竹取物語』総体もさりながら、そこから抽出される「かぐや姫の物語」、あるいは、その原型たる古伝承の型に逆

戻りするかのような羽衣伝説的なものとかかわりに注意を向けることが肝要であろう。

(5) 前掲今井・春秋会著書(4)一〇五頁【語釈】(3)。

(6) 須見明代「『宇津保物語』における俊藤女」(『東京女子大学日本文学』39号 一九七三年三月)、河添房江「夜の寝覚と話型——貴種流離の行方——」(『日本文学』35巻5号 一九八六年五月) など。

(7) 「竹取物語」の引用は、野口元大校注「竹取物語」(新潮日本古典集成)(一九七九年)による。

(8) 奥津春雄「月の都——紫式部の『竹取物語』撰取の方法——」(『国文学研究』43集 一九七一年一月) 参照。

(9) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳「源氏物語四」(『日本古典文学全集15』)(一九七四年、小学館) 四九二頁。

(10) 注(3) 永井論文九五頁。  
大槻修「『有明けの別れ』の女君——その人物造型をめぐって——」(『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』(古代文学論叢第七輯)(一九七九年、武蔵野書院 所収)。

(12) 大槻修訳・注「『有明けの別れ——ある男装の姫君の物語——(対訳日本古典新書)』(一九七九年、創英社) 四四〇頁。

(13) 鈴木一雄校注・訳「夜の寝覚」(『日本古典文学全集19』)(一九七四年、小学館) 四二頁。

(14) 注(6) 河添論文六頁。  
(15) 前掲今井・春秋会著書(6)一五二頁【語釈】(15)。